

---

# ひねくれヒーロー

無花果

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひねくれヒーロー

### 【Nコード】

N3070Z

### 【作者名】

無花果

### 【あらすじ】

NARUTO転生ものの皮を被ったナニカ。並行世界のNARUTOへ転生した後、原作世界ヘトリップ。逆恨みに嫉妬、恐怖と自嘲で構成されたヘタレ気味主人公が覚悟を決める話。目的は生存、敵は虚弱体質と・・・ツツコミきれない天然忍者たち

死と共にはじまるものは、生である（前書き）

死と共にはじまるものは、生である

ホセ・マルティ

死と共にはじまるものは、生である

地球温暖化が各地で叫ばれる最中、猛暑日が続くとある日

ある高校に異変が起きた

1人の男子生徒を担架に乗せ、慌ただしく保健室に運び込まれたものの・・・

部活の仲間や教員たちが青ざめた顔で祈る中、手当ての甲斐なく熱中症で死亡した

黄色い太陽が焼き尽くしたような、夏の日だった

まさか、口酸っぱく注意されていた熱中症で死ぬことになるなんて  
思いもしなかった

先生、職員会議もんだな・・・

いや、絶対それだけじゃ済まないだろうけどさ

悪いことしちゃったな

死んだっていうのに軽すぎるかもしれないけれど

今は本当にそんなことはどうでもいいんだ

目の前の光景が明らかにおかしい

彼方には、見たことのある額当てにベスト、手裏剣やクナイを使っ  
た牽制攻撃、もはや目では追いつけない回避行動

此方には、これまた見たことのある黒マント姿の男たちで、赤い雲  
が刺繍されている

マントを靡かせながら次々に人外的な攻撃を繰り出している

これが走馬灯なのだろうかいや絶対違う

巷で噂の・・・トリップとかいう奴だろうか

ここは神様が現れるのがテンプレだろうに、何をしているのか

現実逃避がてらまだ見ぬ神への暴言を考えた隙に、誰かの忍術の余波が俺を襲った

（ああ、霊体じゃなくて生身だったのか・・・）

傷口からとめどなく溢れる血を拭おうとした処で、俺の意識は途絶えた

誰かの声が聞こえる

甲高く、それでいてか細い泣き声

声の主を探そうと目をあげようとして違和感に気づく

瞼がひどく重い

とてもじゃないが自力では開けない

怪我の影響だろうか、包帯でも巻かれているのだろうかと考えているうちに、突如腹部が熱をもった

じんわり、いや、そんな優しいもんじゃない

熱を認識した途端、激しい痛みが俺を襲い、その衝撃で微かに瞼が開いた

ターバンの上に額当てを付けた青年と、まるで汚らわしいとも言わんばかりの目を向ける、白衣の中年たち

いつの間にか泣き声は止んでいたが、こいつらが泣いていたわけではなさそうだ

三日月が掘られた額当て

そんな額当てがあっただろうか  
もう長い間ナルトは読んでいないから新キャラだろうか、それともアニメのお約束、オリジナルだろうか

「・・・泣きもしないとは・・・気味の悪い器だ」

「いや全く・・・九尾の人柱力といえども、もう少し赤子らしさが見たかったですな」

九尾？

人柱力？そんな馬鹿な、ナルトはどうしたんだ、四代目はどうした、お前らは何者だ？

どうして器と言って俺を見てるんだ



「封印は無事に施された

しかし適合するかどうかはまだ分らぬ

地下神殿にて隔離せよ」

ターバン男が俺を抱き上げた

いくら忍者といっても、簡単に横抱き出来るほど俺は小さくなかった

俺は転生したのか？

赤ん坊から、一からやり直しなのか？

「畏まりました

もしものために医療忍者を数名傍に付かせます

・・・里長、姉君の、・・・御遺体はどう処理いたしましょうか」

「我が姉と言えど、こ奴は先代人柱力

他里に暴かれぬよう茶毘にふし、地下神殿に無縁仏として処理せよ」

短い返事を残し白衣の男たちは去って行った

麻袋に詰められたナニ力を持って

「・・・恨むなら、好きなだけ恨め

お前から平凡な人生を奪ったこの叔父を、この月隠れの里長を・  
・恨んで生きていけ」

男は震えながら俺を抱きしめて、諦めたかのように呟いた

この記憶を最後に、6歳までの間、俺の意識は途切れることとなる

神を信ずることは、感情の問題である（前書き）

神を信ずることは常識や倫理や議論の問題ではなく感情の問題である。

神の存在を立証することは、それを反証することと同じく不可能である

サマセット・モーム

神を信ずることは、感情の問題である

今日は6度目の10月10日

この世界に転生した日、俺の誕生日

太陽の当たらぬ地下神殿、そこが俺の唯一の居場所

大いなる化け物を、尾獣を封印している巫子さまとして恐れられ、  
敬われ、軟禁されている

供え物を運んでくる周辺住人と面会する以外、何一つすることがない

いつも傍で控える、医療忍者から情報を収集することで暇をつぶす

分っていることは、この世界はNARUTOによく似た別世界だということ

木の葉という里は存在しないということ、そもそも火の国自体が存

在していないこと

この国は火ではなく、日の国、太陽神を奉る小国

そんな太陽神のもと、御国のために働く月隠れの忍び里

ここが、俺の生まれた場所

そして今日、誕生日でありながら悲しいお知らせが発覚した

戦争兵器として扱うべく、大切に、しかし放置気味に育成されていたにも関わらず

俺には忍者の才能がない、との判断が下され一生幽閉されることが決定した

理由は簡単

チャクラコントロールが出来なかったのだ

いや、そもそも文字を習得しただけの段階で、教科書だけでチャクラとかいう意味のわからんものをコントロールさせようというのが間違いなのであって！

俺自身に問題はない！・・・と、断言出来ればいいのだけれども

虚弱体質である俺は、生まれつき忍者に向いていないと言われていた

九尾が入ったまま、地下暮らし

出来ることは読書（宗教関連のみ）だけ

ははっ 泣きてえ

せめてもの救いは、九尾が割と友好的だということだろう

いや、もっと小さい頃は体に乗っ取ろうと、画策してたらしいんですがね

精神世界で殺気を向けられる度に失神、発熱、生死の境を彷徨うと

いう流れが確立し、こりゃいかんと思われたそうです

その発熱の影響が、俺の記憶はここ最近まで飛び飛びです

そして九尾「命に関わるという図式が体に刻みこまれたため、声をかけられただけで気絶する始末

完全にトラウマですありがとうございます

いいよ不貞寝するから

それしか出来ないからな

チャクラコントロール・・・出来たら、もつと俺違ってたのかな

才能 があつたら、ナルトみたいにアカデミー通つて、友達作れて、忍者になれたかな

せめて体が丈夫だったら、ロック・リーみたいに体術で頑張れたかな  
なんで俺、こんな体に生まれてきたんだろう

才能があれば

もつと丈夫な体なら

・・・そもそも、転生なんて、なければ



こんなことには、ならなかった

妬ましい、とはこの事だろうか

憎い、とはこの事だろうか

なんで俺をこんな風に転生させたんだろう神様は

見たこともない、居るのかもわからない神をただただ信じて

なかば八つ当たりのようにその存在にケチつけて

頭を抱えてしまったりして

「・・・うっう」

抑えきれない嗚咽が零れる

なんでもないので、こうなったことは仕方がないので

布団にくるまり口元を押さえる

泣けば全部すっきりする

いやな気持ちは全部涙が溶かしてくれる

そう信じて、泣き続けた

暗く、黒い涙が落ちてくる

この狭いとも、広いとも言える牢獄に溢れだしている

どうしようもない恨みと妬み、そしてほんのわずかの怒りが溢れている

あの小さな宿主が泣いているのだろう

正気を取り戻して泣いている

「……哀れな仔……」

先代の宿主は、かように脆弱なものだっただろうかと溢し、

尻尾で涙の洪水を一掬い

鈍い音を立てて、毛どころか身をもを焦がした

大いなる獣よと、大妖怪よと讃えられた、この私の身を焼き尽くす涙

凝縮された恨み

我以上の恨み

「本当に……哀れな……」

せめて最後まで、天寿を全うするまでは守ろう

それが狂わせてしまったことに対する、せめてもの償いのはずだから

たとえ今日負けても、人生は続くのさ（前書き）

たとえ今日負けても、人生は続くのさ。

メチージュ

たとえ今日負けても、人生は続くのさ

18歳の誕生日の朝が来た

相も変わらず軟禁・地下生活

度々吹っ飛ぶ記憶に、自分に何らかの障害が起きていることが理解できた

肉体的なものの以外に精神にも異常があることから、生まれながらの虚弱体質が原因だと断言できない

23

九尾の声・・・ああ、そういえばバルコと呼べと言われたっけ

尾獣・バルコの呼びかけがある度に発熱するのが、異常の原因なのか  
生まれつきの虚弱体質か、それともこの地下での軟禁生活か

あるいはこれら全てが原因なのか

バルコの言では、このまま行くと、俺は30歳ぐらいで死ぬ確率が



高いようだ

熱に魘されながら、早死にやだなーとおぼろげに考えていた日が懐かしい

俺はきつと、今日にでも死ぬのだろう

腰元に迫りくる水を眺めながら椅子に座した

昨日初めて知ったことだが、なんとこの世界にも”暁”は存在していたのだ

ここ最近信徒さん来ないし、里上層部も傍付きの医療忍者も慌ただしいので聞いてみたところ

この国、他国と絶賛・戦争状態だそうです

昨日、敵国の雇われ集団”暁”に襲撃されたそうだ

そして本日未明、暁による地下神殿への襲撃が始まった

傍付きの誰かと暁が交戦したらしく、水遁が使用され水責めに近い

ことになっている

原作でも同じように何処かに雇われていた暁だが・・・この世界でも同じらしい

ということは、だ

尾獣狩りも行われている可能性がある

木の葉の里ないけど、マダラとかいるの？と思ったけれど別人が黒幕かも知れん

予想でしか考えられないが、人柱力である俺が狙い・・・なのか

もしそうなら、近いうちに尾獣を抜かれて俺は死ぬ

里の人間は助けはくれないだろう

我愛羅のように、命をかけてくれるような人は・・・いないから

「九尾の人柱力か」

ついにやってきた雲の外套の男たち・・・って、八人もいる？

おいおい、たった一人の人柱力相手に大人数で囲むとは大人げねえ

俺に戦闘能力があれば原作知識で逃げ切れるんだろうけど・・・

病弱巫子様の噂は他国にも流れてるって言う話はどこに行った

しかし原作通りのメンバーだな・・・いないのはペインと小南の2人か

トビがいるということは原作通りマダラが黒幕かな

「・・・なー旦那、あれマジで人柱力かな？  
なんかすげえチビなんだけど、うん」

生” うん” 頂きましたありがとうございます

しかしサソリはヒルコの姿か

ご婦人方の間で美少年と名高い本体を見てみたかったな

「・・・小さすぎるな」

「やっぱり？座ってるからかなーって思ってたんだけどさ、うん  
鬼鯨の腰ぐらいしかないよな、うん？」

そんなに身長が気になるんだっいたら立ってやるよ勝手に測れ

「あ、立ちましたよデイドラセンパイー  
うわ、ちっちゃ」

「・・・大体140？といったところだな」

「肉食わねえからじゃねーの？  
ほら、坊主とか肉食禁止してんだろ？」

「えーっ太陽教にそんな戒律ないっすよー  
ボク信徒だから知ってますよ！」

なんだかノリがとてつもなく軽い

原作の凄味はどこへやったんだ

飛段とトビはともかく、角都、目測で身長を当てるな悲しくなる

ギャーギャーと敵地で騒ぎだす男たちを押しつけて、1人前に出てくる

・・・イタチだ

「信徒として非常に心苦しいが・・・巫子殿、抵抗せず御同行いた  
だこう」

トビいや、マダラもイタチもうちの信徒？

うちは一族は月隠れに住んでいたのだろうか

この世界における木の葉隠れの里は月隠れの里ってことでもいいのか？

・・・どうでもいいか

両手をあげて降参のポーズ、意味は通じたようだ

水の抵抗により、足取りは格別に重く、牛以下の歩みでイタチに近づいて行く

宿主、正気か？！ 彼奴等に大人しくついて行くなど、何を考  
えているのだ！

パルコの切羽づまった声が響く

ズキズキとした痛み顔に顔を顰める

直に発熱して、倒れてしまっだろう

だけど、今は、今だけは倒れちゃだめなんだ

何も出来ない俺が出来る、唯一の意地の張り所なんだから

胃の腑から何かがせり上がってくる

喉を逆流し、口の端から垂れ下がる液体

「・・・暁の、目的は」

わずかに目を見張ったイタチを尻目に、問いかけた

真っすぐ天をさし、疑問を浮かべた男たちがその指に注目する

口を開くたびに赤い飛沫が見えた

トビに向かい、問いかける

「 月か？」

何を、宿主よ、何を知って

九尾の困惑、迫りくるトビ

ああ、やっぱり原作と同じだったんだ

熱が上がってきたのがわかる、もう立っていられない

目にも止まらぬ速さで俺の顔を覗き込んだその目は、赤く、ぎらつき  
ていた

軽く笑ってみたら、有無を言わず気絶させられた

何がどうなったのか

我が精強なる月隠れが、傭兵集団ごときに敗れ去るというのか



眼下に頂垂れる負傷者たちにかかる言葉も見つからず、里長としての責務も忘れて神殿に向かう

あの地下神殿が顕在であれば、他国に散らばる信徒たちを焚きつけて奴らに対抗する事が出来る

早く、早くと焦りすぎたせいか、側近たちは周りから姿を消していた  
しかし、早く到着する事が出来たことに安著したのも束の間のこと

信徒用に作られていた、重厚な石造りの入り口が無残にも爆破されていた

神殿関係者のみに教えられる出入り口から地下へと降りる

クナイや手裏剣、爆発や様々な術の痕跡

地下に降りるたび、その傷跡は深く、激しい戦いがあったことを知らされる

水浸しとなった大広間へとたどり着き、柄にもなく叫んだ

仮面の男が子供、いや、小柄な青年を抱き上げている

口から血を流し、青褪めながら気絶しているその青年は、まぎれもなく我が里の人柱力で 俺の唯一の甥であつた

「その子を離せッ！」

仮面の男は振り返ることもなく、人柱力を連れて消えた

また、周囲にいた男たちもそれに習うかのように消えていった

負けた

完璧な敗北だつた

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い（前書き）

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い。

愛、ただこれによってのみ人生は与えられ、進歩を続けるのだ。

ツルゲーネフ

愛は死よりも、死の恐怖よりも強い

守ってみせると誓ったのだ

他の誰でもない、自分自身に誓ったのだ

あの仔を守ると誓ったのだ

誓ったというのに、何故我は何もできない？

何故助けてやれない？

拷問を受け、我を抜かれ死を待っただけのあの仔を、どうして助けてやれないのか

トビと呼ばれた仮面の男が、黄泉路へ旅立とうとするあの仔を引きずり上げる

切り刻まれた体、首に絞め跡、幻術を見せられた虚ろな目、毒が混じりあい濁った唾液が滴り落ち、手足は碎かれ爆破された

何の抵抗も出来ないあの仔を助けられない

何が尾獣か、助けることもできない無力な獣が、何が尾獣か

必死に模索する

助ける術を、見つけなければならない

ふと、記憶の隅に追いやった術を思い出す

時空間忍術、まだ我は完全には封印されていない、チャクラの使用は可能だ

出来る、守れる！

藁をも掴むかのように、チャクラを練り上げる

彼奴等に気づかれぬ前に、早く、逃がさなければ

「・・・九尾め、時空間忍術を利用したところで　人柱力はもう持たんぞ？」

仮面の下で嘲る声が聞こえる

「　ああ、そうさな

我が抜かれた、ただでさえ弱い体はもう、じきに果てる」

もう、心臓の音も止んだ

トビがまるで汚物を捨てるように投げ捨てた

「ならば大人しく封印されている」

そうそうニンゲン如きの思い通りになつてたまるものか

「抜かれて足りぬのであれば、詰めて満たせばよかるう？」

そう言つて笑つてやれば、目が赤くぎらつきよつた

全く、これだからニンゲンは好かんのだ

最後の術を発動させる

火があの子を包み込み、我が尾を2本入り込ませた

もうこれ以上してやれることはない

あとはただ、成り行きを見守るうづ

痛みと苦しみ、恨みと嘆きが合わさって胃の腑を燃やした

そのジクジクとした熱さが、黄泉路への灯火だということを知った

白い柔らかなシーツの冷たさが、体の火照りを冷ましてくれる

なかば炭化していた右腕を動かそうと力を込める

診てくれた医者腕が良かったのか、なんとか動かさせた

「・・・あのばぐばづま・・・」

いづがぜつでーなぐ・・・げぼっ」

口内に溜まった血で噎せ返る

2、3分ほど噎せ続け、ようやく落ち着いた

何をやっていたんだろうか

意地をはったところで、現状をひっくり返せる力を持たない俺に何が出来たというのか

結局マダラに警戒され拷問を受け、洗い浚い吐いただけじゃないか

そうして死を待つだけの俺に、あの狐は何を考えていたのか

なんで俺なんかを助けた

お前なんか嫌いだったのに、恐がったのに

涙が溢れて止まらない



「おお、起きたか！」

白髪に赤い隈取り、眩しく笑った老人は、伝説の三忍・自来也

手に水の入った桶に真新しいタオル、どうやら助けてくれたのは彼らしい

礼を言うことも忘れ、溢れる涙をぬぐうことも忘れ、ただ呆然と口を開いただけだった

**愛する者に欺かれている方が、幸福である。（前書き）**

愛する者に欺かれている方が、時として真実を知らされるより幸福である。

ラ・ロシュフーコー

愛する者に欺かれている方が、幸福である。

「両足と切り傷は大体治せたが・・・手のほうは時間をかけて治療することになった

・・・とにかく、目覚めてよかったわい」

かろうじて動かせた右腕を見てそう言った

顔周りに飛び散った血を、タオルで拭い取ってくれる

何から話せばいいのか、何がどうなっているのか

混乱しすぎて分らない

「お前さんは そうじゃな、5日ほど昏睡状態でな

わしの知り合いの医療忍者に治療されてようやく落ち着いたんだ」

知り合いの、医療忍者？ツナデか？

「あとは、お前さんが何者なのかというのも知っておる

・・・のう、並行世界の人柱力よ」

「はぁ！？

ちよ、げぼつぐえつ・・・並行世界だと！？」

好々爺とした表情が一転、剣呑としたものに切り替わる

どういうことだ？何故俺が人柱力だということを知られている？

しかも並行世界？なんなんだ、ここはどこだ？

「お、おじえでくれ！

「ここはづき、月隠れの里、もじぐはその周辺だろうっ」

喉を痛めているからかろくな発音にならない

またもや血が飛び散り、それを拭ってもらっ

「落ち着けい、体に障る

・・・ここは湯隠れの里にある湯治施設だ

御主がいう月隠れの里とやらは存在せん」

なんで湯隠れ・・・ああ、覗きか変態仙人

布団の傍にあった水を飲ませてもらう

血が混じった嫌な味がしたが、幾分か喉の痛みが和らいだ

「・・・なんで、あんだはそれを知っている？」

「五日ほど前、わしが山道にて倒れた御主を見つけた

パルコと名乗った九尾が、わしに全てを教えた」

パルコさん、貴方何をしてらっしゃいますか

自来也はまっすぐ俺を見て、5日前の出来事を語りだした

「わしは自来也といつての、物書きとして取材旅行をしておった

ここ湯隠れの里は良い観光地で、若いおなごげふん・・・インスピレーションを湧きたてる場所だ

しばらく通い続けた湯治場から、隠れた名店たるこの施設のことを聞いてのう

新たなネタを、と思い山道を勇み歩いておった

そしてわしは見た、鮮やかな金色の光が空間を引き裂いた瞬間を

金色の光が、炎で出来た卵を庇うかのように包み込んでおった

空間の裂目からは黒い禍々しい炎が、光を追いつめるかのように溢れ出た

裂目自体は直に消え去ったのだが、残りの黒炎は光に一太刀浴びせてから消えよった

そのうちに光は狐の姿をとり、わしに気づいて交渉を持ちかけた

もはや息絶える寸前の者の願いを切り捨てるほど、冷酷ではないんで

わしはパルコの願いを聞き入れ、引き換えに知識を渡された」

喉が渴いたからか、それとも、次の言葉に悩んだためかここで自来也は言葉をつぐんだ

「・・・知識？」

「うむ・・・

日の国、太陽教、地下神殿、そして・・・暁のことだ

お前さんが人柱力で虚弱体質だということも教えられた」

「・・・炎の、卵っで？」

「お前さんにはパルコの2本の尾が入っておる

そのうちの一本が防衛機能として作りだしたのが炎・・・そうじやの、狐火、とでも言おうかの」

もう一つは生命維持に使われておる

遠い目をしながら説明される

思わず右手で腹を撫でた

・・・命が助かったことよりも、それに対する謝罪よりも先に思い浮かんだのは疑問

何故、と声に出さず呟く

答えは返ってこない

「・・・パルコはの、こうも言っておった

あまりにも不憫だったのだと、思わず憐れんでしまったのだと、な」



思考が停止した

憐れみ？

ああ、そうだな、いつだってあいつは俺をひ弱だの、未熟だの、可哀想だのとのたまいやがる

そうか、不憫か

不憫な境遇になったのはてめえの存在だと知ってて抜かしたか

自来也の目が、ひどく冷めたように見えて、哀れんでいるようだった

「・・・見返したいか？」

自来也の手が俺の目を覆った

じんわりとした暖かさが体に染み渡る

何だろうこれは、どこかで感じたことがあるのだけれど分らない

「今までチャクラが扱えなかったそうなの

しかし、パルコのチャクラがお前に力を与えた

これからわしが修行を見てやる、パルコの巫子よ、忍者になれ」

思わず涙があふれた

大声で泣きわめくことはなかったが、それから小一時間は泣き続けていたと思う

泣き疲れて眠るころに俺はぼんやりと誓った

パルコの守りが、狐火が必要ないぐらい強く生きよう

チャクラが使えなくても、忍者になれると、証明して見返してやろう

眠りに落ちた時、金色のお日様が笑った気がした

竜胆よ貴方に届け（前書き）

竜胆の花言葉

淋しい愛情、

悲しみにくれているあなたを愛する、

貞淑、勝利、的確、正義感

## 竜胆よ貴方に届け

本当にこれで良かったのか

いくら約束と言えど恨みを糧とする生き方をさせて良いものか

「難儀だのう・・・」

泣き疲れて眠った子供、いや違った、青年を見る

赤く腫れた目蓋が痛々しい

ふと、腹部を見る

弟子である四代目火影が使った封印術と似通った術式

並行世界の九尾・パルコが言ったように、この世界とあちらの術は類似しているようだ

「・・・必要ならば嘘もつくが、本当にこれで良かったのかのう・・・」

・  
」

瞼を閉じればすぐ思い出せる

決して忘れてはならない記憶、語れることは許されない記憶

これは取引だ、仙人よ

取引、だと？わしにそんなものする必要はないんだがのう

僅かながら宿主の記憶は我と同調している

ゆえに、御主の最期と木の葉の行く末も理解しておる

息も絶え絶えに笑った九尾

何故そこまで人柱力の助けを求めたのか

なあに、毎回声をかけただけで死にかけられると同情もするさ

・・・それに、償わねばならぬからな

炎の卵が解れていく

中にいたのは満身創痍の子供

何も出来ないと思いつめ、追いこんでしまったのは我が原因  
なればこそ、我が守るべき・・・

しかし、今となつてはもう守ることも出来ぬ

・・・せめて、戦う術を、叶うならこの仔の夢であつた忍びに  
してやってくれ

子供を見るその目に嘘はない

だが・・・

・・・九尾、いや、パルコと言つたな

お前にとってこの子はどのような存在だ？

目を見開いて空を仰ぎ見る

困つたような、照れたような動きが尾獣とは思えない仕草だつた

どのような存在と言われても・・・はじめは、恨みと哀れみだ  
けで・・・

しかし、名を貰つてからは・・・成長を、見守りたいと思つたの  
だ

これが、尾獣か？

いや、違う

こやつは、親だ紛れもないただの親だ

・・・貴様の弟子の子を、この世界の人柱力を守りたくば” 暁”を探れ

里を守りたくば、蛇の動向を探ると良い  
詳しいことは、宿主から聞け

もう長くは持たないと溢し、子供を託される

なんと子供の軽いこと、気絶しているはずなのに重みが感じられない

あい分かった！

この三忍・自来也、御主の命がけの嘆願を聞き届け、必ずや立派な忍びにしてみせよう！

胸をはって答える

親から子を預かるのだ、自信がなければ心配するだろう

頼む

・・・そして、どうか宿主には伝えんでくれ

九尾パルコは、ただ憐れんだだけだと、そう伝えてくれ  
宿主が正気を保てるのは、誰かを妬み、恨んでいるときだけな  
のだ

・・・一体全体何だというのか、こやつらの関係が理解できん

それと大切なことを忘れていた  
宿主は今年で18歳、分別のつく年頃だ

まさに衝撃とっていい位、すさまじい発言だった

こんなに小さいのか！？

そう叫べばもうパルコは光の粒子となって消えていた



「・・・しかし、パラレルワールドの狐だからパルコとは・・・  
案外安直な奴だの、お前さん」

運命は我らを幸福にも不幸にもしない（前書き）

運命は我らを幸福にも不幸にもしない。

ただその種子を我らに提供するだけである。

モンテーニュ

運命は我らを幸福にも不幸にもしない

ここは湯隠れの里

観光地として有名な湯治施設を多く保有する、忍びの隠れ里とは思えない平和な里だ

月隠れからこちらへ逃れて4ヶ月

地元住民と交流を持つに至ったこの俺だが、残念な子と評されている  
それはなぜか

「おいこらエロジジイ！  
テメエ俺を囷にして逃げるんじゃないぞ！」

三日と開けずに騒動を起こす人物の連れだからだ

俺は簀巻きにされ、エロジジイこと自来也に覗き場へ引きずられて  
いる

取材と称して覗きを行うジジイの悪癖に付き合わされるたびに、こ  
れも修行と言われて俺が囷にされるのだ

覗きがバレて女性客に追われることもある、俺が施設の人に怒られることもある

理不尽だ

「この自来也さまに向かってエロジジイとは何事か！  
そんなだからお前は大きくなれんだ」

呆れたように溜息をつかれる

こっちのほうで呆れているというのに、このジジイ反省の色もない

「関係ねーだろが！・・・げほっ  
あ、あのねーちゃん良い尻」

覗き場に到着すると、微かに見える女体を観察する

胸も良いものだが、尻も良いよね

「何！？」

途端目を輝かせ鼻息荒く覗き始める

本当に何故こんな男が伝説とまで呼ばれるのだろうか

立派に育った弟子、四代目火影に申し訳なく思わないのか

あと弥彦と長門と小南に謝れ

三代目火影は割とエロかったのできつと同類なんだろう、多分

メモをとりながらヒートアップしていく自来也を尻目に、深く溜息  
をついて・・・咳きこんだ

良かった吐血しなかった

場所を移して人里近い野原に向かい合う俺たち

「よしよし、本日の取材はこれまで！  
それでは修行の時間といくかの」

にんまりと笑われたのがムカついて脛を蹴ろうとするが、案の定軽く避けられた

「そんな見え見えの蹴りじゃあたらんぞ?」

頭に手をのせられる

18歳だと知っているのにこの行動、おちよくっている、こいつはおちよくってやがる

「・・・さつさと修行つけろよ」

手を払いのけてやる

そうするとカッカッと笑って座りこまれた

「うむ、それではいつも通り瞑想からだ、座れ」

以前チャクラコントロールの才がないと言われていたが、自来也の修行を受け始めてから少し変化が見られるようになった

そもそも、チャクラとは肉体エネルギーと精神エネルギーを練り上げたものだと言われている

人間に生まれつき備わっている力がコントロール出来ないわけがない、そう自來也は断言した

神殿時代、教科書見せられて後は放置という状況に問題があるのだとも言った

チャクラはあるのだからどう練り上げるのか、どう扱うのかを教えないければ使えるわけがない

慰められるかのように語られた

・・・確かにそうだな、いきなり教科書見せて試合やれとか言われたことないわ

ぶつつけ本番にもほどがある

「コン、集中が乱れとるぞ?」

自来也に指摘されて思考の渦から引き戻される

再び瞑想に集中する

俺の腹部に熱が籠もる、自来也が唸った

また失敗か、溜息をついて立ちあがり、目をあけると炎に包まれていた

「うーむ、やはりパルコのチャクラしか引き出せんか」

首をかしげて悩まれる

・・・自来也に修行をつけてもらって早三ヶ月、未だに俺自身のチャクラを練り上げたことがない

瞑想すると必ず九尾の、パルコのチャクラの残照たる狐火が俺を覆うのだ

俺自身のチャクラは練れないが、この狐火を扱うことは可能になった



覆わせることしか、出来ない防御用だけだな

これはきつと我愛羅の砂と同じなんだろうか

「とりあえず狐火纏ったままりハビリ運動せい」

不燃布で作られたクッションを手渡され、関節運動を始める

切り傷とか爆破痕は治ってるんだが、サソリに飲まされた毒の影響が残っていて体が動かしづらい

寝ころんで関節を曲げたり伸ばしたりしていると、そそくさと木桶と水差し、タオルに着替えまで用意される

ふっ過保護師匠め、慣れてきたリハビリ運動で吐血なんぞ、もうしない！

せっせと用意された看護用品を横目に勝ち誇った笑みを浮かべた

その15分後、血塗れになった上着を洗う姿が住民に目撃された

湯隠れの里内部、決して未成年は入り込めない風俗店が立ち並ぶ裏路地

2人の男が居た

「・・・なー角都よオ」

1人は鎌を持った黒い外套の男

連れであるもう1人の覆面をつけた、同じく黒い外套を身に付けた男、角都に話しかける

「・・・黙って歩け」

「俺ら、尾獣狩りしてんだよなア？」

立ち止まる角都、訝しげに連れを見る

「どうした？とうとう頭がイカれたか？」

冗談拔きの低い声、医者によるか？と声をかけた

「・・・なんか癪に障るけどよオ、今は良いや  
俺ら、九尾の人柱力って、捕まえた・・・よな？」

「・・・飛段、お前死に過ぎて頭が・・・」

冷や汗をかいて飛段を哀れむ

それに激怒するはずの飛段から何の反応も返ってこないことがまた  
不審がらせる

「いや、捕まえたって・・・あれ？でもまだ尾獣狩りの説明された  
だけ？」

まだ人柱力の居場所探しの途中で・・・あれ？」

頭を抱え始めた飛段

自分でも何が何だかわからないと騒ぐ

「あーッわかんねえ！！」

そうだとビに聞きやいかってトビって誰だ？

・・・うーん・・・鬼鮫あたりならわかんذار、な、角都ウ！」

納得したらしく、立ち止まったままの角都を置いて足早に歩き出す

「・・・・・・・・・・」

溜息をついて仕方なく歩きだす角都

騒がしい相方に疲れが出てきたようだ

「・・・・・・・・結局何だったんだ・・・・・・・・」

聊か肩を落とし年相応の哀愁を漂わせる

寂しげに風が外套を揺らした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3070z/>

---

ひねくれヒーロー

2011年12月20日17時48分発行